

才一次暴動体験談

鈴木秀一

自行現場に着くと、ちらいさわぎだつた。写真がたつたりとのつた新聞を前にして、七、八人とかヤガヤとわめき合つてゐる。西成の住人は私一人だつたから、成行として話の中心は自然と当店の受け持ちになつてしまつた。「ぞりヤーすこかつたぜ、うん、履物の山巴、あのカスミ町の交差点かまるで整地の出来ていない現場みたいにしてころがゴロゴロよ。」

平井は五時ピッタリ迄の仕事なのに「タラになつたらまた始めるんだらう？ 早く帰つて少し昼寝をしないと」(妻ワラ)ホーシン七百円渡してくれた。当時はせいせい八百円とまりが相場なのである。時計を見ると午後二時、物のホーシンが耳もとでぞーつと言つた。「明日またオトヤ話を頼むぞえ。楽しみ

や投石で五分五分といかなくとも結構立ち向かつたものである。

「夜になつたらこつちのもんや、こめえらだつた、殺してやるぞオー」警察から火い吹かしてやるわい」話にふつさうな叫び声があちこちから上がる。警察の屋上から強力な我光器が突如一せいに点つた。だが、腕をか

くしたりうしろむきになつたりする奴は一人もない。その時、腹見知りの一人がぞつと囁いた。「水崎町の交番や、おもしろいぞえ」その囁きは、耳から耳へとおつと、しかし異常な早さで伝わつていく。群衆の半分程かめだはないようにポツポツと振つていく。その穴は腹の裏のガードに近づくと征つて多く、早くなつていく。もう人の顔、顔、顔で何も見えな

にしてゐるさかいなあ」夏の夕暮れは、まぼろつこい程に遅い。それでも七時を過ぎると西成署の前には既に一〇〇人二〇〇人と人の顔が並ぶ。警察の窓と

いう窓は満足なものは一つもなく、ガラスの破片がチョッピリと窓枠にしがみついてゐる程度である。そして柔道場のタタミが何重にも窓に寄せ掛けられている、その玄關前で機動隊員が半分不安そうにして群衆をにらみつけてゐる。

三十人そこそこの機動隊員では、アッコ側の方が断然威勢がよい。早くも涙が打つた。胸の連中が「税金泥棒めー」と、どなり散らしてゐる。当時はアッコの教團青事はピツクリする程強く、仲間達が警棒でたたかれてゐるのをさんざんに目撃してゐる故か、棍棒

のぼる。「よし俺もだ、勿論石へならえである。(当時新今宮の駅は無かつた。一投路低いに、中山太郎堂の敷地の一部にあつた水崎町の交番を目の下に見る絶好の場所に一ヶ隊隊が陣をおろす。

涼しい風は吹いてくるし、投石用の弾丸は無尽蔵にあるし、高架のレールは尻にふめた

くて気持良いし、皆んなゴキゲンだつた。水崎町の交番は既に群衆がオソツタ後なのか来りサンの音は皆目見えない、葉蘭の中をすかして見ると、ラッカロウゼキ丸も軒子もひっくりかえつてゐるし、勿論ガラスなんかはひとかけらもない。それでも投石が時々起きる。誰か二、三人が交番に飛び込んでいった。はんだかこそこそやつていたなと思つたら炎と煙が上がつた。群衆がワーッと叫びを挙げる。だが、炎は下火になつていく。浴衣をひっかけた若い衆が背中にさした団扇を掴んで飛んでいったと思つたら、タタミとまるとサンマを焼いてゐる様にして火を大きく

していつた。もう火は文番の中を聖火の如く
正して捲がって行く。遠くの方でサイレンが
聞こえたが群衆は一向に平気である。消防車
が人垣を通れない。「あほんだら、何しに采
やがった？」とドナル。「向うから廻れッこ
うちは人で一杯だ。誰かが叫ぶ。消防車はお
となしくバツクして反対方向に廻る。そして

またそこでドナル「火を消して見やがれ
てのえ迄消してやるわ。」そのうちに消防
車に投石が加えられ始めた。群衆のハサミ打
ちに加えて石ころ攻撃では「すべてはバ。」
である。
もうこれで聖日の現像で「昼寝フキ」の出
面七百円は確実であろう、とニッコリ笑った。

詩

さういには たしか 俺をい

萩之茶太郎

この街は
魚市の明け暮れがにぎやかよ
いッしよにしたようなものさな

のッペらぼうな世の中で
女の優待はあそこのしまりよう
男の優待は頼とりれき書と
とおりさうばのあいさつでも
笠ヶ崎の男にやえんがねエー
人間は
顔じゃないよ心だよ
銭じゃないよ心だよ

サクランホのような娘ちゃんよ
おいらの服がよこれてるからつて
おいらの心がよこれてるような
そんな目つきで見るとは止しな
おいらの服がよこれてるのは
きょう一日さ
このおいらがさ
汗水ながして働いたからよ
女盛りのおっかさんよ
まじめに勉強せんとあなるよ々と
ツルハシあつてるおいらを指さして
あなたのかわいい息子にいつてたな

土方仕事がいけないことのように
働くことがわるいことのように
しかしなアー あんたの亭主も
働かんとちがうのかね

腹が出だしたおやしさんよ
まじめに 忠実に おとなしく
節約して働いてくれえすれば
失業することはありやしねエーと
いッもおいらに説教くれてたが
いまの世の中どうですな
えいッちくしッう資本家のしわざよ
さういッたあんたが失業てる

この街は
魚市の明け暮れがにぎやかよ
いッしよにしたようなものさな

おかしなもんさね
おにいちちゃん身に気を付けてと
奇み屋の娘ちゃんがさういうだけで
仕事おわつて疲れた足が
いッのまにやらそこへ向う
あらッいま帰りがいの

ひとことさ
コッアの敷もふえだすものよ
そんなときじゃ
けんかもまたはじまるものさ
あッちのすみから
こッちをにらんてばッてんが
——ほんにこッ ここは
九州どんの ああかどこばい——
娘ちゃんと話を頼どりされて
やきもちやいて腹をたててる

のッペらぼうな世の中で
おいらが生きてく法律は
おいらのものはとらねエーぞ
おいらのものを上げねエーぞ
おいらのものを上げねエーぞ
おいらのものを上げねエーぞ
おいらのものを上げねエーぞ
おいらのものを上げねエーぞ
おいらのものを上げねエーぞ

この街は
魚市の明け暮れがにぎやかよ
いッしよにしたようなものさ